

「臨地実習から得た学びと将来像の変化」

◎瀧川 未来¹⁾

熊本保健科学大学 保健科学部 医学検査学科¹⁾

【はじめに】

私は現在、熊本保健科学大学の4年次に在籍している。今回は、3年次後期の臨地実習から得た学びや気づき、さらに経験できて良かったことや経験したかったこと、将来像の変化について述べる。

【臨地実習について】

私は臨地実習に際し、実際の臨床の現場でしか得られない学びや経験を期待していた一方で、初めて臨床の現場に赴くことへの不安や責任を感じていた。そのため、知識の整理や検査手技の確認を徹底するだけでなく、先生や先輩方からの助言をいただき、臨地実習に臨んだ。

臨地実習では、様々な症例の標本観察や患者接遇など、臨床の現場でしか得られない貴重な経験を積むことができた。加えて、就職活動や国家試験対策に感じていただいた助言は、その後の学修や進路を考える上で大変参考となった。また、私が伺った施設では、ダブルライセンスの取得に力を入れており、複数の資格を持ちながら様々な検査業務を行う検査技師の柔軟な働き方は、将来像に大きな変化をもたらした。

一方で、時間の関係上、経験できなかったことも多く、検査室によっては見学が中心となってしまう場面もあった。また、実習生の立場ではチーム医療を十分に実感することは難しかった。さらに、先輩技師とのコミュニケーション量や実習中の自習時間の多さ、指導・見学内容などは実習施設間で差異が見られ、施設による環境の違いを実感した。

臨地実習を通して、大学で学んだ知識が臨床の現場でどのように活かされているのかを知ることができた。同時に、自分の知識不足を痛感し、学修意欲が一層高まった。また、患者さんと接することで医療従事者になる身としての自覚も強まった。

【将来像の変化】

臨地実習で様々な学びと経験を経て、知識や技術を身につけるだけでなく、医療従事者として患者さんの不安に寄り添い、質の高い安心・安全な医療を提供できる臨床検査技師になりたいと考えるようになった。就職後は資格取得にも挑戦し、将来的には複数の検査業務を柔軟に担い、チーム医療に貢献できる臨床検査技師を目指す。

検査学生の多様なキャリア選択

◎有益学志¹⁾

純真学園大学保健医療学部検査科学科¹⁾

臨床検査技師の就職先は病院勤務が中心であり、学生にとっても病院勤務が第一の選択肢とされる傾向が強い。しかし、近年は検査センターや研究機関、医療機器メーカーなど、従来とは異なる場で活躍する機会が広がっている。こうした多様な選択肢を知ることは、進路を模索する学生にとって重要である。

大学において実習前に受講したキャリア形成に関する授業では、臨床検査技師の働き方が病院に限られないこと、多様なキャリアパスを主体的に考える必要性を学んだ。この学びは、その後の就職活動において視野を広げる契機となった。臨地実習では病院勤務の専門性や社会的意義を理解する一方で、臨床検査技師の資格を持つ医療機器メーカーの担当者が現場で活動している姿を目の当たりにした。この経験は、病院以外でのキャリアを具体的にイメージする大きなきっかけとなった。

その後、就職活動を通して企業説明会に自主的に参加し、医療機器メーカーにおける学術職や営業職といった職種に関心を持つようになった。製品を通じて幅広い医療現場に貢献できる可能性に魅力を感じ、病院勤務と企業勤務を比較検討した結果、企業への就職を選択するに至った。

本発表では、授業での学びと実習や就職活動での経験をもとに、キャリア選択に至る過程を整理し紹介する。これにより、同じ立場にある学生が自身の将来を考える際に、病院以外の可能性を考えるきっかけとなることを目指す。

臨地実習へ向かう私の決意と臨床検査技師への夢

◎井上 朋華¹⁾

日本文理大学保健医療学部保健医療学科¹⁾

学内での経験を通して抱いた思い、臨地実習に臨むにあたっての目標、そして私の理想とする臨床検査技師像について述べる。

私は、高校時代は他の医療職を志望していたが、高校の先生の薦めにより本学に入学した。入学当初は臨床検査技師の仕事内容を十分に理解していなかったが、血液検査学の講義を通して、検査値から疾患を推測できることに興味を持った。さらに、グラム染色や血液塗抹標本作製などの実習を経験し、検査が診断に直結する重要性を実感した。これらの経験から、医療を支える臨床検査技師を志すようになった。

実習に臨むにあたり、まず基本的なあいさつを大切にし、社会人としての礼儀を意識したい。また、5W2Hに加え「How risk」を意識し、小さなリスクを共有して事故を未然に防ぐことを心がけたい。さらに、報連相に「アドバイス内容の確認」と「行動前の確認」を加えた「報連相確認」を実践し、理解の行き違いを防ぎたい。SNS利用にも十分注意し、情報管理を徹底することも必要であると考えている。

臨地実習で学びたいことは大きく分けて3つある。1つ目は、学内では経験できない実際の検査室業務を理解することである。輸血の内部精度管理や二重チェックの仕組み、自己血輸血などについて学びたい。2つ目は、正確さの重要性を体得することである。検査結果は診断や治療に直結するため、小さなミスも重大な影響を及ぼす。そのため確認作業を徹底し、現場の工夫を吸収したい。3つ目は、コミュニケーションの重要性を実感することであり、最も大切にしたいことである。臨床検査技師は検査室業務が中心であるが、感染防御チームや栄養サポートチームなど多職種との連携を通じて医療に貢献している。私は授業の一環で行ったグループワークにおいて、相手の話を正確に聞き取り、分かりやすく伝えることの難しさを痛感した。この経験を踏まえ、医療現場ではより一層コミュニケーションの重要性を実感し、実践力を養いたい。

私の理想の臨床検査技師像は、チーム医療の一員として信頼され、患者に安心を与えられる存在になることである。また、異常をいち早く察知し、健康を守る役割を果たすとともに、常に新しい知識や技術を取り入れ、専門性を高め続けたい。私はこれらを通じて「信頼され、患者に寄り添える臨床検査技師」になることを目指している。

未来を切り拓く臨床検査技師を目指して

～新しい検査の創出とビッグデータからの新知見発見への挑戦～

◎山本 一慶¹⁾

九州大学 医学部保健学科 検査技術科学専攻¹⁾

近年の医療技術の急速な発展に伴い、臨床検査の重要性はますます高まっている。その臨床検査を担う臨床検査技師には、幅広い知識と高度な技術が求められている。今後は日常業務の遂行にとどまらず、研究を通じて医療分野の発展に貢献できる臨床検査技師の存在が必要である。このような背景から、私は幅広い医療知識・技術の習得と研究能力を兼ね備えた臨床検査技師を目指し、九州大学で学んでいる。

私の将来目標は、基礎研究と臨床研究の両方を行える臨床検査技師になることである。そのため、来年度から九州大学大学院へ進学し、特に研究に関する専門知識を深めていく予定である。現在は1型糖尿病患者に対するインスリン産生細胞の再生医療に関する基礎研究に取り組んでいる。大学院では、この再生医療研究の継続とともに、糖尿病患者の検査データを用いたビッグデータ解析にも挑戦する計画である。

これらの研究活動を通じて、質の高い研究技術と論理的思考力を身につけることは、将来の研究活動において不可欠である。また、再生医療分野は今後、臨床検査技師が重要な役割を担う領域であると考えており、この分野の基礎知識を習得することは極めて有意義である。

基礎研究により新しい検査技術の開発が進展すれば、より高精度で迅速な検査の実現が可能となり、医療分野への貢献と患者負担の軽減につながる。再生医療研究の進歩は、様々な疾患に対する根治療法の確立を可能にする。私が現在手がけている研究も、1型糖尿病の根治療法の一つとなることを目指している。一方、臨床研究では、日常業務での気づきや疑問点について自らビッグデータ解析を行うことで、検査値の新たな臨床的意義を見出し、臨床現場への有意義な情報還元が可能となる。

以上より、研究能力を有する臨床検査技師の存在は、今後の医療進歩に貢献する人材として益々重要性を増していると考ええる。理想の臨床検査技師像の実現に向けて、日々自己研鑽に努めていきたい。

臨地実習を経て変化した臨床検査技師像

◎西岡 優¹⁾

九州医学技術専門学校 臨床検査科¹⁾

私は幼い頃から命に直結する医療関係の仕事に対する憧れを抱いていた。職種を調べていく中で、臨床検査技師という仕事を知り興味を持った。「検査」とまとめられているが、多岐に渡る仕事内容であった。最初にイメージされるエコーなどの生理検査、細胞や組織を扱う病理検査、細菌の同定や薬剤感受性検査を行う微生物検査、適正な輸血を行う輸血検査、他にも血液検査、採血など患者様と関わる機会もあることを知った。これらは自分の強みである探求心を持つことで興味のある分野へ没頭し、資格取得までできるところにとっても魅力を感じ、臨床検査科の道へ進むことを選んだ。

座学と実習を交え「なぜそうなるのか。」をグループで話し合う本校の特色は、根本から理解し知識として繋げたい私にとって、とても恵まれた環境であった。しかし臨床の現場では私たちが学内実習で学んだ手技の多くが機械化されていることを知り、臨床検査技師の存在意義に疑問を抱くようになったまま臨地実習が始まった。

臨地実習では検体検査で再検をする理由、そのまま臨床側へ返すものの見分け方に視点をおき、疾患や患者様の容態とつなげることをご指導いただいた。検査結果をただ返すだけでなく何か気になる点があれば追加オーダーを医師に促す場面や医師・薬剤師と治療の方針について話し合う姿を見た。病理診断室や手術室では、執刀医と臨床検査技師がコミュニケーションをとり、どの部分をみてほしいのか、病理医へ繋げることの大切さやNSTやASTなど検査室の外でも大事な役割を担っていることを知り、チーム医療の繋がりを強く感じた。

臨床検査技師は新たな業務として追加された内視鏡検査や、これから先もっと広がるであろう業務に対しても適応していかなければならない。そのためには、常に疑問を持ち根本から理解する探求心を持ち続ける必要がある。臨床検査技師として、やはり一番大切なことは「正確な検査結果」を出すことであり、疑問を抱く根拠を常に持つておくことは信頼性を築く上で大事になってくる。検査結果をそのまま提出するだけでは、臨床検査技師の意義は薄まる。チーム医療として様々な職業が関わっているからこそ相手の気持ちを読み取り、相手に合わせて伝える能力も兼ね揃え、考えることができる臨床検査技師だからこそその仕事をしていきたい。

養成校の教育目標と臨地実習の要望や意見

◎小丸 検造¹⁾

学校法人 九州総合学院 九州医学技術専門学校¹⁾

【はじめに】

臨床検査技師養成校の教育目標は、単に専門知識や技術を修得させるだけでなく、医療人としての倫理観や人間性を育むことに重点を置いています。

そして臨地実習では、その教育目標を達成するため、実践的な能力や多職種連携を学ぶことを目的にしています。

【九医技の教育目標と校訓】（本校 HP より）

1. いたわりと思いやりの心をもった人間性豊かな医療人の育成
2. 専門的知識と技能を持った医療人の育成
3. コミュニケーション能力に優れた医療人の育成

校訓 「努力せざる者は 其の任に堪えず」 初代校長 吉田直人

「苦勞を避け、努力しない者には、その志を果たす資格がない」

【臨地実習施設への要望】

1. 医療機器の見学や操作と感染管理指導（各種機器の操作研修、感染対策や検体の取り扱い等）
2. 多様な業務経験の提供（各分野での業務指導や特殊検査の見学（遺伝子検査や TDM 等））
3. 学生の学びの確認と総合評価（各分野での評価と実習期間中のテーマ研究発表会 等）
4. **受け入れ施設の増加と臨地実習指導者増員のお願い**（日臨技は各分野に指導者配置を提言）

【臨地実習施設からのご意見（抜粋）】

1. 挨拶や患者接遇等の礼儀がしっかりできること
2. 検査業務を積極的に学ぶ姿勢をもつこと
3. 基本知識以外にも感染対策や安全管理等が理解できていること 等

【臨地実習から学んでほしいこと】

臨床検査技師は、単に検査を行う技術者ではなく患者の命と健康を支える医療従事者である。ゆえに、医療人として患者に寄り添う気持ちやチーム医療に貢献する姿勢を学んでほしい。

【卒後に目指してほしい臨床検査技師像】

1. 患者中心の医療を考える技師（接遇や倫理観を持ち検体の背景にいる患者を意識する）
2. 高い専門性と技術力を持つ技師（学会や研修会に参加し、各種の認定資格を目指す）
3. チーム医療を理解し協調性のある技師（多職種連携を意識しチーム医療に貢献する）

連絡先：095-856-2120（代表）

実務経験を経て変化した私の検査技師像

◎八幡 紗矢¹⁾

長崎大学病院 ゲノム診療センター¹⁾

今回、若手臨床検査技師の立場から学生フォーラムにて発表する機会をいただいた。私は昨年春に長崎県の九州医学技術専門学校を卒業し、同年に長崎大学病院ゲノム診療センターへ就職した。当院はがんゲノム医療拠点病院に指定されており、私は遺伝子検査に用いる病理検体の作製を主な業務としている。がんゲノム医療とは、がん組織の遺伝子変化を調べ、その結果を基に個々の患者さんに最適な治療法を選択する医療のことである。私は臨床や病理の先生方とコミュニケーションを取りながら検体の選択や依頼調整を行うなど、多職種と協力しながら日々取り組んでいる。さらに先月には、当院での遺伝子検査の結果データを基にセミナーで講師を務める機会をいただき、貴重な経験を得ることができた。私は2年前の学生フォーラムで「将来の臨床検査技師像」をテーマに発表し、当時は研究にも携われる検査技師を理想像として描いていた。学生時代の私は、検査技師を検査室や研究室の中で専門的な業務に従事する存在として強くイメージしていた。しかし実際にがんゲノム医療という分野に携わり、検査技師は検査部だけにとどまらず医局や診療現場と密接に関わり、診療方針の決定やチーム医療の一員として重要な役割を果たしていることを実感している。さらに、検査を通じて得られる情報が患者さん一人ひとりの治療に役立てられていることに、責任の重さを実感するとともにやりがいを感じるようになった。臨床検査技師としてまだまだ未熟ではあるが、現在の領域に限らず幅広い分野で経験と知識を積み重ね、将来的には自身の体験を基に後輩の育成や検査技師を志す学生のサポートに携わりたいと考えたようになった。また、学生時代には長崎大学病院で臨地実習でお世話になった。教科書だけでは理解が難しかった検査や検査機器も実際に目にすることで理解が深まり、現場で働く技師の方々の姿を通して将来像を具体的に描くことができた。臨床検査技師として働き始めてから実習生と関わる機会はまだまだないが、将来迎える立場となった際には、自らの実習経験を活かして学生に意味のある学びを提供できるよう努めたいと考えている。

「臨地実習ガイドライン 2021」に沿った未来の臨床検査技師の育成

◎片渕 直¹⁾

社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院¹⁾

2022 年入学生から適用された臨地実習に対応した「臨地実習ガイドライン 2021」の第 2 版が発行された。新カリキュラムの重要な改訂ポイントは「必ず実施させる行為」、「必ず見学させる行為」、「実施させることが望ましい行為」、「見学させることが望ましい行為」に関する評価基準書が追加された。これによって実習内容や評価の統一化が期待される。臨地実習単位も従来の 7 単位から 12 単位に改定され、さらには生理学的検査については 3 単位以上の実習が求められるようになった。これらの改訂で、実習内容はチーム医療にまで拡大し、検査室での実習も見学型から参加型に変更された。

当院は 312 床、36 の診療科を標榜している急性期病院であり、臨床検査技術部は 29 名所属し、そのうち臨地実習指導者は 1 名である。

実習のローテーションは生理学的検査に関する実習は時間が定められたことにより見直しを行った。チーム医療の現場や検体採取、ベッドサイド検査など件数が少ない行為については臨機応変に実習機会を提供できるよう工夫している。

私は主に病理検査業務を担当している。実習生には、検体回収から切り出し、標本作成など可能な限り実践的な実習してもらっている。当院では、エコー下穿刺など検体を採取する際には技師がベッドサイドへ出張し、医師より直接検体を受取って目的に合った処理を行っている。実習生にはその場にも同行してもらい、検体の採取から処理に至る実務と他職種との連携を同時に学ぶ貴重な機会としている。

このように「臨地実習ガイドライン 2021」に沿った臨地実習を通じて、実践技術の統一的な修得だけでなく、臨床検査技師としての役割と責任を自覚し、チーム医療の一員として主体的に関わる医療人の育成に力を注いでいます。

連絡先：0956-33-7151

臨床検査技師の卒年教育の改善

～より良い臨地実習を目指して～

◎深澤 恵治¹⁾

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 専務理事¹⁾

国民の医療ニーズは増大・多様化し、チーム医療の推進による業務拡大、新検査項目の登場、検査機器の高度化など、臨床検査技師を取り巻く環境は大きく変化している。それに伴い求められる役割や知識・技能も変わり、養成施設の教育内容見直しや臨地実習の充実による質の向上が必要となった。

こうした社会的・技術的背景のもと、臨床検査技師の養成課程そのものが時代に即して見直される必要性が高まり、厚生労働省（以下、厚労省）はこの状況を受け、「臨床検査技師学校養成所カリキュラム等改善検討会」を開催。関係団体や教育機関、現場の意見を踏まえた検討の結果、令和3年3月31日付で臨床検査技師等に関する法律施行令および養成所指定規則の一部改正を行い、省令を交付（文部科学省高等教育局長・厚労省医政局長）。併せて「臨床検査技師養成所指導ガイドライン」（厚労省医政局長通知）を発出した。これらの改正では、臨地実習施設での実施方法や指導期間等の標準化が盛り込まれ、全国どこでも一定水準以上の教育が受けられる体制を整備することを目的としている。さらに、臨地実習の質向上と教育の一貫性確保を図るため、「臨床検査技師臨地実習指導者講習会の開催指針」も新たに示された。教育カリキュラムの具体的改正点としては、総単位数が95単位から102単位へと7単位増加したこと、臨地実習の単位が全国で統一され12単位となったことが挙げられる。従来は養成指定校と承認校で単位数に差があったが、この改正により一本化された。また臨床参加型実習の観点から、「必ず実施させる行為」「必ず見学させる行為」に加え、「実施が望ましい行為」「見学が望ましい行為」が規定され、学生が現場で経験すべき内容が明確化された。人員配置面では、全養成校に「臨地実習調整者」を置くこと、全臨地実習施設においては「臨地実習指導者講習会」を受講した指導者を1名以上配置することが義務付けられた。この講習会は、日本臨床衛生検査技師会（日臨技）と日本臨床検査学教育協議会（日臨協）が共催し、Web方式で全国的に実施している。目的は、資格を持たない学生が患者と接する臨地実習において、医療安全、患者への配慮、コミュニケーション能力を含む必須の知識・技能・態度を備えた臨床検査技師を育成することにある（令和7年8月9日現在、受講者は2,374名）

さらに、臨地実習の全国的な共通化を進めるため、日臨協の協力を得て「臨地実習ガイドライン2021」を発刊した。本ガイドラインでは、臨地実習指導者の要件や業務、臨地実習調整者の役割を明記するとともに、改正教育カリキュラムの抜粋や実習項目ごとの行動目標、評価方法を掲載し、全国で客観的評価が可能となるよう配慮している。また、臨地実習に必要な各種事務文書の雛型を収録し、新たに実習を開始する養成校や受託施設が迅速かつ効率的に準備を進められるよう支援している。しかし、推奨評価表による評価基準については、場合により学生への要求が過度に厳しくなる可能性があり、現場の実情に即した統一基準への見直しが必要であるとの指摘もある。厚労省は「臨床検査技師養成所カリキュラム等改善検討会報告書」において、新カリキュラムの適用から5年を目途に見直しを検討すると明記しており、日臨技では令和6年度中に「臨地実習あり方WG」を設置し、臨地実習の質向上に向けた議論を重ねてきた。その成果として「臨床検査技師養成教育カリキュラム等における臨地実習の各論点課題に対する意見とりまとめ提言書」を発出し“学生が経験すべき行為の見直し”“学生と施設のマッチング制度の検討”“指導者の考えの整理とScope・到達目標の検討”などを含め5つの視点で整理を行った。

以上の提言書を踏まえて、今年度中には「臨地実習ガイドライン2021」の改訂作業を進め、内容の現場適合性を高めると共に、日臨教と協働して厚労省への要望書作成を行い、制度改正や施策提案を通じて全国的な臨地実習の質向上をさらに推進していく予定である。